

名誉館長館話実施報告抄

新野 直吉*

奈良時代の秋田城 平安朝における秋田城とその対外性 武家時代の秋田城の存在
内藤湖南 東海林太郎

はじめに

令和元年の館話は、5月10日（金）「奈良時代の秋田城－秋田の文化度と秋田城建設－」、6月7日（金）「平安朝における秋田城とその対外性」、7月5日（金）「武家時代の秋田城の存在」という「秋田城の歴史的意義」の前期と、9月20日（金）「内藤湖南」、10月11日（金）「東海林太郎」の「秋田の先覚」の後期を行った。

奈良時代の秋田城

律令制度の国政になった古代日本が和銅元年（708）9月に日本海側最北の地方行政体として、「越後国出羽郡」を建て、「出羽柵」という行政の役署と「征狄所」という軍事的施設を設置した。現在の山形県の庄内地区と、その延長接続地の由利地方にも及ぶ行政区の郡であると理解される。

実は律令制度になる前に、当時の越の国宰である阿倍引田臣比羅夫によって、齶田・淳代・津軽の3郡が建てられた史実があるのである。だから上越地区に存在する越後の国府からは遠く「出で端」などと認識していた当時の官人たちは、征夷の対象たる「蝦狄」の地であると見ていたかもしれないが、奥羽山脈の東側の陸奥国の「蝦夷」とは、実態が全く異なることを知ったと認められる。5年後に独立させて「出羽国」とするのである。何故ならばこの日本海添いには、既に半世紀前に齶田・淳代・津軽の3郡が建てられて日本国家の政治に対応していた行政経験が存在していたからである。陸奥では軍事的反抗として表われるような局面でも、

出羽側では上下の交渉として処理できたと考えられる。

だから和銅5年9月23日付で下越地区に位置する出端の郡である出羽郡の名称を生かした「出羽国」を独立させ、陸奥国から、最上・置賜の2郡を移し、内陸部も持った国を建てたのである。

国家政治にとっても「秋田」の文字を用いた、元は「齶田」「飽田」などと表記していた地域は重要であった。即ち秋の稲穂満ちた田地を明白に表わすからである。陸奥・出羽が稲作文化の発達が遅れている地帯であるかの如く受けとめられている傾向が強い視方に対し、秋田は米産の地帯であると国政の立場からも認めていることになるからである。

米産地ということになれば、出羽国域の平地で田地経営が充実されなければならない。稲作の先進地から多くの「柵戸」が各地から移住されることになる。和銅7年には尾張・上野・信濃・越後の国から200戸を出羽柵戸に移した。翌年の霊亀元年（715）にも相模・武蔵・上野・下野・上総・常陸から1000戸を陸奥国に移しているから、出羽に限ったことではないが、出羽については霊亀2年400戸の移民を行い、養老元年（717）にも信濃・上野・越前・越後の百姓を各100戸の400戸を出羽柵戸とし、更に同3年にも東海・東山・北陸諸道から200戸を出羽柵戸としているのである。

養老5年には出羽国を陸奥按察使に属させることが定められた。当時の国策として地方官の上級官人として設けられた東北の官人の役署は多賀城であったから、律令国家の官制として出羽国は陸奥と共にこの多賀城を頂点とする行政下に属することとなるわけであるが、前代から

*秋田県立博物館

備えていた文化性は失われることはなかった筈である。

古代日本にとって高度の外交の一つである渤海使が向うから来航するところが出羽であったことを見落してはならない。神亀4年(727)に初回の渤海使が出羽に来航するので、日本海対岸との関係の深さがわかる。

古く肅慎と称した領域が後漢の時代には挹婁となり、唐の時代には靺鞨となり、『続日本紀』に「渡嶋津軽津司従七位上諸君鞍男ら六人を靺鞨国に遣し其の風俗を見せしむ」という旨の養老4年の記述が生ずる展開になるのである。北海道側と青森県側との港の役人である鞍男が政府の命令で渡海し視察する関係が生じていたのである。

7年にしてその対岸の地に、高句麗という日本と親交のあった国の遺民大祚榮が中心となって「震」という政権を樹立した。唐の玄宗皇帝は祚榮を「渤海郡王」に冊封し、やがて祚榮の孫の大欽茂の時代に「渤海国王」の地位を認めるのである。神亀4年に初回の使節を日本に派遣したのは、祚榮の子の武芸王の時である。まだ国王の称は唐朝から認められないような初期に日本への親しみは確立された国交を導く程に確かになっていたのである。その使節が訪れたのが出羽だったのである。

使に対して日本政府は手厚い対応をした。本来24人だった使節が途中で何かあったのか、出羽に着いたのは高齊徳以下8人であったが5ヶ月余平城京に滞在させた。そのうえ安全に帰国させるべく総勢62人も的人员で送使を編成したのである。それに注目すべきことは、送使の長は引田朝臣虫麻呂であったことである。虫麻呂は先に見た阿倍引田臣比羅夫の後裔氏族である。さらに天平2年(730)には虫麻呂は遣渤海使として史上に登場する。朝廷が渤海との外交を重視したことがわかる。そして相手の渤海は秋田に来るのである。

天平5年政府は「出羽柵」を庄内から秋田清水岡に北遷するのである。酒田・鶴岡方面の港には外交の相手が来ないからが主たる理由であったと考えられる。この年には秋田内陸に

も雄勝郡が設けられるが、注目すべき事実もある。それは馬である。

天平5年には出羽献上の馬5匹が北陸を通り、翌6年には陸奥献上の馬が4匹東海を通ったことが、史料上明らかである。これから平安朝にかけて奥羽の馬が上方権力層に希求されることが史実上顕著であるが、古来中国や朝鮮半島から渡来し、現在も若干の小形馬が伝来している西南日本の馬とは、来由が異なる名馬が奥羽で飼育され始めていたことを示していると解される。蒙古のような騎馬民族と密な関係にある、対岸の地から「北の海みち」で伝わった馬たちが、上方にも認められ、朝廷に献上され始めていたことを示している。

天平11年(739)にも渤海使が出羽国に来航、そこから都に赴いている。しかも対岸の人々が出羽に来るのは官人だけではない。同18年には渤海人と同じ地帯の住民である鉄利人が、千百余人という多勢で、日本の民に帰化したいと来航したのである。日本側は友好国の民などを多勢帰化を許すことは妥当でないと考えたのであろう、帰化は許さなかったが、「出羽国に安置し衣服を給いて放還(ゆるしかえ)した」と『続日本紀』に記録されている。当然住居も食糧も給し滞在させたのであろう。

宝亀2年(771)渤海国使等325人が野代湊に来着した。当然総勢帝都に赴いたとは考えられないから、然るべき期間出羽で待機した人員も多かったであろう。更に宝亀10年にも王化を慕い出羽国に来航した渤海人・鉄利人359人に祿を与えて此の年の滞在を許したということもあった。記録に残らないような少人数なら小舟でやって来た例も実在した可能性がある。

こういう外交事項も持つことになれば、出羽国も秋田城に国府機能の職務を安定的に備えなければならない。宝亀11年には「秋田城介」制を定めることになる。庄内の国府で国司の「守」が行っている職務の中で幾つかの職権を国司の「介」も代行できるということを制度化したわけである。秋田城が副国府的な役割を果たせる職能を持ったことになる。

平安朝における秋田城とその対外性

平安時代になって延暦5年(786)に渤海使65人が「漂着」と称し出羽に来航した。内陸の大和国の平城京と違い、平安京は日本海にも近接性を備えているわけであるから、出羽秋田などではなく、越の海岸であろうと京に近い港津に来航するようという、日本側の意向は伝えられていたであろうから、漂着などと記述されたのであろうが、渤海使は延暦14年(795)にも出羽に来着している。だがその後は出羽来航の記述は伝わらない。

しかし出羽国の秋田城が北方の要衝であることは変りがなかった。六国史の『日本後紀』には、延暦23年11月22日の「出羽国言上」に、建置以来40余年の秋田城が、土地境塙・五穀不宜の北隅に孤居しているから停廢し、河邊府を保守したいと言った記述がある。

奈良朝末にも鎮狄將軍安倍家麻呂らが、当時の国司が「秋田は保ち難く、河辺は治め易し」と言っていたのを否定したことが『続日本紀』に記録されている。庄内にいる国司幹部が、秋田城の存在に反対的になることはあったことが認められる。だがその時も政府も安倍鎮狄將軍もそうはしなかった。この度も同様の対応であったと解される。

30年も経過した天長7年(830)正月28日の条で、『類聚国史』には、「鎮秋田城国司正六位上行介藤原朝臣行則」が、地震で「城郭官舎并四天王寺」などに被害があり、撃死15人負傷百余人であることを報告し、秋田城司の任務を出羽介が行っていたことが明記されている。

元慶2年(878)に、出羽秋田では珍しい住民の武力大反乱が起きた際も、庄内の国司の長官が処置に当たるのではなくて、京都の朝廷の摂政藤原基経が先頭に立って対応し、秋田城司良岑近(著)の苛政が原因で、200年来朝威に従って来た住民が反徒となったのだと認めている。殆ど庄内に位置する国司以下国府は動いていない如くである。

基経は、自分は文吏であり争乱対応には不適であると断わる右中弁藤原保則を「出羽権守」

に任用して乱の平定に当たったので、国守は介入する場面は存在しなかったのである。名吏保則の鎮守將軍小野春風と共に処理に対しては反徒も降伏し、乱は平定となった。

乱後秋田城司に任じられたのは、皇別の名族清原氏の本官は左衛権少尉で乱には出羽権掾として出動していた清原令望であった。権大目・校尉・旅帥・火長など各段階の秋田城の正規の武官達も任命され、列士303人・鎮兵450人・兵士350人などの秋田城の軍隊も配備された。

城司令望は乱後の政情が安定するまでの数年間秋田城司を勤めた後、大宰府に転任するが、新羅の侵攻に備える為には、東北の兵士が必要だという考えを持ち、府の幹部として東北人軍を九州に配備することを実施するほどの秋田理解者であった。横手の平鹿、湯沢の雄勝、仙北の山本の3郡の平穩策にも心を配っていたので、平鹿の地元勢力がやがて清原氏を称するようになるのは、令望の血筋がこの豪族の中に成立するようなことがあったものと理解される。

武家時代の秋田城の存在

平安時代の年月が進むと、一層武家勢力の存在が強まるが、秋田城はその存在性を失わなかった。永承6年(1051)奥州の重大な武力衝突である「鬼功部合戦」に於いて、安倍頼良の軍を防ぐべく、陸奥守藤原登任は応援の軍を、出羽守にではなく秋田城介平重成に求めたのである。この時代になっても奈良時代に設けられた秋田城の組織は健在であったのである。

更に時代は進んで文治5年(1189)6月に、平泉から当時「義頭」と称されていた源義経の首が鎌倉に届き、鎌倉の頼朝軍の28万4000騎が北征に動員され、東北勢力の出羽軍も秋田三郎軍や田河太郎の勢力が対戦するも、大勢力には対応することができず、敗れてその首は梟首されることになる。その鎌倉幕府の世になっても秋田城制は廢されなかった。

建保6年(1286)には出羽城介藤原景盛が、『吾妻鏡』3月16日条に記録されているが、藤原氏のこの家系は名字に安達を称してい

るが、嘉禎3年（1237）にはその子藤原義景がこの職に任ぜられ、建長6年（1254）には義景の子の泰盛が秋田城介になったことが「関東評定衆伝」に記録されている。その子宗景は弘安5年（1282）に秋田城介になり、その後も同じ家系の時頭が嘉元時代に、高景が嘉暦時代に秋田城介になっている。初めの頃の景盛は源頼朝の側近である盛長の子であるから名門で、嘉元の時頭の娘が北條高時の母であった。

実は鎌倉幕府だけが秋田城を重んじたのではない。鎌倉幕府を否定した立場の建武の朝廷でも、後醍醐天皇は出羽守葉室光顕に「秋田城務」を掌らせるのである。光顕が足利方に殺されると、後村上天皇の興国6年（1345・北朝の貞和元）にその子光久を秋田城介に任ずるのである。

その足利幕府も源泰長を秋田城介に任じ、秋田城介を軽視するようなことはなかった。このように中世になっても、南朝であろうと北朝であろうと、秋田城介を軽視や無視はしなかったのである。このことは中世になっても秋田城介の原由である「秋田城」を、国政上重視していたことを明示するものであると考えられる。

近世を迎える原点になる織豊時代になっても、天正3年（1575）に時の天下人たる織田信長の嫡子である信忠が「秋田城介」に任ぜられるのである。『信長公記』にはこのことを「菅九郎無比類御働に付て、かけまくも忝し、天帝より御院宣を蒙り、秋田城介に任ぜらる。御冥加の至り也」と記されているという。天正の初期なので院宣ではなく宣旨であろうが、菅九郎は信忠の呼び名で、「秋田城介」を含む「八介」は『貞丈雑記』でも「侍の面目とする官也」と明記されている。

尚朝鮮国の学者がこの時代に作図した日本地図でも、東北地方の域などで記載されているのは「秋田城」だけであったのを実見したことがある。国際的にも注目された存在だったのである。

内藤湖南博士の事績

慶応2年（1866）南部藩鹿角の毛馬内で、代々漢学者の家庭に、内藤十湾の次男虎次郎として生まれた。名は調一であった父が吉田松陰の崇拜者で、松陰の名の寅次郎にあやかるべく子供の名をつけたのである。

今回湖南のことを話に選んだのは、昨年秋田大学の同窓会誌「旭水」に、虎次郎先輩に関わる小文を寄稿したことが動機である。令和で4年号を体験した身であるといっても、湖南博士が世を去られた昭和9年（1934）には未だ小学生であった自分が、湖南博士に関心を持ち昭和28年4月に秋田大学に赴任し、その夏休には毛馬内に湖南のことを調べに赴いた程関心を持ったのは、学生時代に湖南の弟子である岡崎文夫東北帝大教授の授業に出て、その学績に触れたからである。

私の時代は自分が人を求めている先を選んで応募するような世情ではなく、指導教官から指示されて赴任するということであった。助手時代にも「国造」を中心として日本古代史の研究をのみしていた私は、主任教授に「4月から秋田大学学芸学部勤務しなさい」と命ぜられて赴任したが、担当する授業は「社会科教育」を主とし、日本史概説が任務だったので、直接関係はない東洋史の大先生であろうと、自分が『律令』で指導を受けた東洋史の曾我部静雄教授も京都帝大出身で湖南博士のことに触れることも少くなかったので、崇敬的に関心を持っていた博士の郷里である毛馬内には、休暇で帰郷することよりも関心があって訪問したのである。

そしてそこでお会いしたのが後で記す高橋克三先生であった。郷里の湖南博士顕彰活動に関与することになるが、それは後述することとして、そこで学習できたことも含めて博士の伝記を記すこととする。

数え年5歳にして36歳の母容子が亡くなる。しかし虎次郎少年は本格的な漢籍の素読学習を始める。明治3年（1870）のことである。しかし2年後の明治5年に彼を育てていた祖母が

死去し、その上姉も嫁してしまふ。更にその翌年兄も失うこととなる。父は再婚し仕事の都合もあって尾去沢に移住する。明治7年(1874)数え年9歳にして尾去沢小学校に入学する。13歳で初めて「漢詩」を作る。17歳にして父の勤務のことにより毛馬内に帰る。

明治16年(1883)数え年18歳の春、秋田師範学校中等師範科に入学、秋には高等師範科に編入される。18年に卒業すると北秋田の綴子小学校の首席訓導に就任する。鹿角で湖南博士の顕彰活動が盛んになる中で、私も昭和31年の夏に綴子小学校を訪れ資料を直接見ることが出来、武内益雄という先生が内藤首席訓導のもとに教頭職であったことも知り、武内家を訪問し、孫の武内正俊氏に種々教示を得た。武内家は伝統ある「内館文庫」を持ち、祖先には般若院英泉という清修験者があったことでも有名であるが、そこで「綴子良友諸君ニ留別ス」という明治29年9月東京から出した湖南の美文の手紙を視ることができた。

小学校に扁額として保存されていた若き日の湖南の写真は、年月で薄れていたが綴子に近い町の鷹巣の写真屋で複製した原版がある筈だと考えたので、秋大学芸学部を出たばかりの若い女教師先生に探して貰い、その努力で数ヶ月後原版が見出されたので、高橋克三氏に届けたら内藤家にも伝わらぬ若き日の湖南像とわかった。

湖南の首席訓導は2年間だけであった。明治20年(1887)上京して大内青巒のもとで「明教新誌」の記者となった。同27年には「朝日新聞」の記者となり、29年に田口郁子(18歳)と結婚し、30年「台湾日報」記者に赴任したが翌年主筆を止め「万朝報」という有力紙の記者になる。この年には夫婦で毛馬内に帰省する。

32年長男が誕生する。健吉という名で有名な学者に成長する。そしてこの年には自身が中国本土に初めて渡航する。学界では有名な「敦煌文書」を発見する学問上の事蹟もあった。だが学界よりも政治に関心があったのか34年には政界進出を伺う行動もあったが、35年には満州視察に赴いた。大陸を視察した結果も関係してい

るであろうか、「対露主戦論」の執筆ということもあった。

そして明治38年(1905)には日露戦争後の満州視察も行った。翌年には「朝日新聞」を退社するが、朝鮮・満州を視察する行動は実行する。そしてこの年は郷里との関係でも父親が脱稿した『鹿角誌』の序文の執筆するという行為があった。

明治40年(1907)42歳を数える彼は10月に京都帝国大学文科大学講師に就任する。秋田出身で京大の文科大学初代学長になった狩野亨吉の招きによるといふ。狩野は満33歳の若さで母校東京大学予備門の後身である第一高等学校の校長に就任したが、その時も湖南を教官に招こうとしたが果たさなかった。湖南の学歴が問題になったからであるといわれる。

今度も同じ問題はあったというが狩野学長の強い湖南評価があったものであろう。湖南の大陸に対する関心は強く、翌41年にも朝鮮半島から満州の吉林省を視察している。

明治42年(1909)京大教授に昇任し、43年には文学博士の学位を得、名実共に帝大教授に相応しくなる。しかし大陸関心は強く以後も毎年のごとく朝鮮・満州に赴いている。

勿論関心はアジアに限られているわけではなく、大正13年(1924)にはヨーロッパにも渡っている。11年には黄疸を患い、12年には胆石の手術を受けるというように、体調は良くなかった状況の中での渡欧なので、御子息など若い人達を伴い、翌年に帰国するという慎重なものであった。

大正15年(1926)61歳となり帝国学士院会員となったが、年齢上8月に京都帝大教授は停年となる。翌年名誉教授になり相楽郡瓶原村の恭仁山荘に隠棲する。相楽郡は奈良時代に「恭仁京」という帝都のあったところである。当時の名誉教授は相当の敬仰を受ける称号であったという。

昭和6年(1931)その年の宮中の「御講書始」の儀に、『通典』の御進講を行う栄誉の任を果たしている。「満洲事変」が起こる年である。8年には病軀を押して、前年成立していた

『満洲国』を68歳で訪問している。関心の強さを表わすごとく、溥儀皇帝をはじめ首相以下の高官たちとも会談している。

昭和9年(1934)69歳の2月に胃癌と診断され、6月に逝去されたが、京大の弟子達は後年も深く尊敬していた。私が若い日習った先生方で、鹿角を訪ね、「伝記」を著した人達もいる。

勿論郷里の崇敬も深く多い。私が最初の毛馬内訪問で、地元の方の助言でお訪ねした高橋克三氏は、内藤家と関係深い教育者で、当時は教育関係機関の委員長であった。そして京大で湖南教授に講義を受けた人に会いたいという求めに、東北大学の関係者を招くよりも、秋田県人で然るべき人が良いと考えて、秋田市立高等学校長刈田文雄氏を紹介申し上げたのであった。刈田校長は京大東洋史科卒業生で湖南博士の教え子でもあったからである。

高橋氏の樹立した『内藤湖南先生顕彰会』はやがて機関誌を持つように充実し、昭和30年代に入ると中学校校庭に「頌徳碑」が設立され、昭和58年(1983)4月24日の湖南博士五十回忌記念の「顕彰会総会」では、96歳の高橋翁の招きで、「湖南博士の日本古代史」という題の講演をさせて頂くこともあった。博士は東洋史家であるが『日本文化史研究』(弘文堂)などの日本史著書もあるのである。

東海林太郎の経歴

秋田出身歌謡界の著名人東海林太郎は、明治31年(1898)12月11日秋田市台所町で父大象・母イチの長男として生まれた。父は宮城県出身で母は秋田の女子師範学校出身の女教師で、1歳違いの妹みさを、36年には弟次郎、その翌年には三郎という弟が生まれ、太郎は38年(1905)に保戸野小学校に入学する。そして40年には末弟の四郎が生まれるのである。

ところが翌明治41年に父大象が秋田県庁を退職して満洲の鉄道会社に就職するのである。

「南満洲鉄道」は日露戦争後に日本が経営することになった鉄道会社である。当然一家が渡満

することになると思われるが、同居している母方の祖母カツが太郎の渡満に賛成せず秋田に住み続けることを望んだようで、次郎と二人の孫と秋田での生活を続けることになる。44年に保戸野尋常小学校を卒業した太郎は秋田中学校に進学することになる。

彼は少年時代から音楽に親しみがあつたのであろう、父親にバイオリンを贈ってくれることを求めた。ところが期待して開いた包から出て来たのは空気銃だったという。弟は喜んだが彼は期待外れということであった。更に大正5年(1916)に中学を卒業して、音楽学校進学也希望も父の反対によって断念することになり、翌年早稲田大学に進学することになる。東京専門学校という段階から早稲田大学に改まる段階で、秋田県出身ではTDKを創業するそして代議士になる斎藤憲三と同期生になり親交関係になる。

やがて早大の講師に就任した佐野学という当時有名な коммуニストの先生の、講義に感じ入りゼミに在籍して猛勉することになる。しかし大正9年(1920)には中学校の同窓生等と、秋田で「洋楽演奏会」を開催するように、音楽愛好者の立場に変化はなかった。バイオリンを演奏し、東京音楽学校在学中の庄司久子と共演もする。

大正11年その音楽学校出身の庄司久子と1月11日に結婚する。春には早稲田大学商学部を卒業し、研究科に入学するが、翌年満鉄本社に入社することになる。8月6日東京出発、9月1日赴任し調査課勤務となる。翌13年(1924)には長男和樹が誕生し、調査論文「満洲に於ける産業組合」の論文を執筆するなど力を発揮する。

大正15年には次男玉樹も誕生するが、翌昭和2年(1927)には鉄嶺図書館長に就任する。昭和3年満鉄の「陸上競技大会」で、100m・200m・500m・走り幅跳・三段跳の5種目に優勝という能力と若さを示す。

昭和5年満鉄を退社する。もう父親は湘南地方に家を買求めていたので、太郎も秋田に帰ることはなく、6年には弟三郎が開いた中華料理

店の資金援助をしたので、欧州留学の資金にしようとして貯めていたというものは無くなったという。そしてこの6年10月には先に帰国していた久子夫人とは離婚し、渡辺静と再婚するという変化があった。

久子夫人は次男をお腹に入れたまま先に帰国してしまっていたということから、渡辺新夫人という音楽学校で久子夫人の後輩だった女性との間が親密化したので、誇高い久子夫人は自から行動したものと考えられている。

新夫人は正しく歌手東海林太郎の内助を実行した。本来バイオリニストであったのに、ピアノで夫のレッスンの伴奏に励んだ。昭和8年(1933)には「宇治茶摘唄」のレコード初吹き込みを行い、いよいよレコード歌手生活の出発となる。時事新報社主催第2回音楽コンクール入賞の快挙もあり、翌9年には「赤城の子守歌」と「国境の町」の大ヒットがあり、名歌手の地位が形成されてゆく。

昭和8年には67曲、9年には113曲、10年には101曲、11年には98曲、12年は100曲、13年に81曲、14年80曲、15年29曲、16年53曲、17年45曲、18年25曲、19年9曲、20年4曲、21年2曲、22年7曲、23年10曲、24年7曲という、戦争中と敗戦後などの時代の変遷と歌謡界の関係なども伺える状況であるが、初めの頃は、荘司史郎・高橋文雄・朝吹薫・小笠原淳・藤原英夫などの芸名でレコードを出していたということであるが、本名こそ彼の本態を示すものであったのである。

戦時中には戦地を訪れ戦地部隊を慰問をすることも芸能人の行うところであった。彼には「麦と兵隊」という著名な曲もある。彼は安全な後方部隊の慰問だけでは満足できず、銃弾も飛んで来る前線まで無理に望んで単独で出してもらい、更に前方でも戦っている兵士のいることを知り、連絡用の軍の電話を借り、地面に伏せた姿勢で前方の兵士にも聞こえるように歌唱したのである。

ここから心に迫まる事象が生起する。前線で彼の歌を聞いた、秋田仙北の土川の出身の兵士が、涙声で東海林が秋田の人だからと、実家

に自分が元気なことを伝えて欲しいと頼んだのである。歌ったのは周知の赤城山の歌だったというが、気がついたら彼の後ろで聴いていた将校も泣いていたという。実際は帰国してから長文の手紙を兵士の生家に出したが、その後生家から彼に届いた手紙では、彼に伝言を頼んで間もなく兵士は戦死していたという悲しい結果であったという。

彼の本性を示すようなこととして感じ入ることは、昭和20年(1945)8月15日のあの終戦の日のことである。あの悲劇の日には予定も計画もすべてが崩れ去るような日であったのに、この15日午後に予定していた長野県飯田市での音楽演奏会を、計画通りに実行したというのである。

翌21年は勿論進駐軍の統制下であるが、戦後初のレコード吹き込み「さらば赤城よ」を行なった。この年も翌年も曲数は少なかったことは先に述べたが、23年には癌で手術を受けることになった。診断されたのは京都大学医学部であったが、開腹手術を受けたのは東京大学医学部であった。多分それからは病後の状況もあったのであろうが、消極的ではなかった。

昭和26年(1951)戦後初の海外音楽親善使節としてブラジルに演奏旅行を勤める。国内でも昭和28年日本マーキュリーレコード重役(相談役)歌手として入社活動する。この年は早大時代からの友人同県選出代議士で戦後追放中だった斎藤憲三氏が、26年秋から東海林歌謡ショーなどで備えていたところに、あの「バカヤロー解散」による選挙で当選した。ただこの年の12月末には52歳の妻女静夫人が亡くなる悲しみもあった。

30年11月28日二度目の開腹手術を行ったが、12月31日の「NHK紅白歌合戦」には病院から出演して「義経の歌」を歌唱し、歌手の本分を果たしたのである。主人公の人格を示している。

33年には日本マーキュリーレコードを退社する。翌34年には青木美瑛子と結婚する。この年には母イチが79歳で亡くなっているのだから、家庭の事情もあったのかもしれない。

昭和38年（1963）「日本歌手協会」を設立初代会長に就任する。人間個人としても歌手が権利を守ることが目的であったと考えられる。しかし翌39年8月には三度目の開腹手術を行うという現実になり、直腸を切断し、人工肛門になるという結果になる。この年中村邦雄会長の『東海林太郎歌謡芸術保存会』が設立される。

重要視される東海林歌手には昭和40年に歌謡界では最初の紫綬褒章受章という栄誉があり、第7回レコード大賞特別賞の受賞を受ける。そして純な愛郷心の表われともいえる41年の母校保戸野小学校でバイオリンの演奏を行った。

ところが43年には人工肛門にできたポリープの切除というようなことも起った。年末には最初の妻であった庄司久子70歳の亡くなることもあった。翌44年にはまた歌謡界初という勲四等旭日小綬章の叙勲を受けた。

昭和46年には11月最後のレコードとなる「高原メロディー」吹き込みを行なった。翌47年春には3月22日第23回NHK放送文化賞の受賞があり、益々栄誉に輝いたが、10月4日享年73歳で逝去された。正五位を贈られ勲三等瑞宝章を

受けた。11月16日には「第3回日本歌謡大賞放送音楽特別賞」を受けた。

この名歌謡人と大女優高峰秀子の密な交わりもあった。男の子は二人あっても女の子は居らぬ家庭に、昭和8年「赤城の子守唄」を歌った際に、大ヒットの日比谷公会堂興行で、板割の浅太郎の役の東海林が背負った勘太郎という男児役を演じた高峰を、養女に迎えようとしたのである。

本来養女身分であった高峰は、その望みを受けることは出来なかったが、相当強引に東海林は母子二人を家庭に迎えたのである。上の男の子と同じ八歳の高峰と子供三人仲良しになったが、養母は女中扱いをされたので、養父が不満で永い同居は続かなかったという。

東海林太郎といえば直立不動の歌謡姿勢が周知の通りであるが、本来の姿勢であったことは確かだが、歌手出発時に年に百曲以上を吹込む状況では、飾りの身振など曲毎に行うことなど出来なかったことであろう。それが名歌謡人の不動の人気に連なったのであろう。